

博士学位論文審査要旨

申請者： 佐々木 孝浩（慶應義塾大学斯道文庫教授）

論文題目：日本古典書誌学論

申請学位：博士（学術）

審査員：主査 田淵句美子 早稲田大学 教育・総合科学学術院教授 博士（人文科学）

副査 大津 雄一 早稲田大学 教育・総合科学学術院教授 博士（文学）

副査 新美 哲彦 早稲田大学 教育・総合科学学術院教授 博士（文学）

副査 海野 圭介 人間文化研究機構国文学研究資料館准教授 博士（文学）

I 本論文の目的

本論文は、書誌学的分析を基盤にして、日本古典文学における書物の形態と内容との関連性を、総括的に論じたものである。書誌学は古くから存在する学問領域であるが、従来は作品の内容的研究とやや乖離して行われていることが多かった。こうした状況に対して、本論文は、書誌学的な研究方法により主に書物の形態に着目して情報を抽出するという、書誌学の活用法を具体的に提示しながら、書物の形態と、その内容とが、深く関連することを明らかにし、書物という器に保存されているその作品・本文を正確に把握し、新たな視点で捉え直していくことを目的としている。ゆえに、本論文では、特定の文学ジャンルや作品に限って対象とすることなく、広くジャンルを分散させて総合的に考究している。

II 本論文の構成

本論文は、広い視点で、日本古典文学を書誌学から捉え直そうとするものである。ゆえに、概論を述べたのちに、和歌、連歌、物語、軍記物語、随筆、歴史物語などを、次々に取り上げて論じていく構成である。時代的にほぼ中世期が対象となっているが、これは、文学作品の平安時代写本が極端に少なく、傾向の抽出を行うことが難しいこと、江戸時代には商業出版の成立により、従来の造本の故実があまり顧みられなくなり、これを加えると明確な傾向を明らかにすることができないと考えられることによる。

本論文は序編、そして第一編から第五編までの本編からなる。目次は以下の通りである。

はじめに

序編

第一章 日本古典書誌学の可能性序説

第二章 日本語の文字種と書物の関係について

第一編 卷子装と冊子本

第一章 冊子本の外題位置をめぐって

第二章	繪巻物と繪草子―挿絵と装訂の関係について―
第二編	卷子装と歌書・連歌書
第一章	勅撰和歌集と卷子装
第二章	勅撰和歌集の面影 ―『新撰菟玖波集』の卷子装本をめぐって―
第三章	卷子装であること ―早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集〔政弘句抄出〕』をめぐって
第三編	源氏物語と書誌学
第一章	「大島本源氏物語」の書誌学的研究
第二章	二つの「定家本源氏物語」の再検討 ―「大島本」という窓から二種の奥入に及ぶ―
第三章	「大島本源氏物語」続考 ―「関屋」冊奥書をめぐって―
第四編	平家物語と書誌学
第一章	書物としての平家物語
第二章	卷子装の平家物語 ―「長門切」についての書誌学的考察―
第三章	「屋代本平家物語」の書誌学的再検討
第五編	古典文学と書誌学
第一章	定家本としての「枕草子」
第二章	書物としての『枕草子抜書』
第三章	書物としての歴史物語
第四章	室町期東国武士が書写した八代集 ―韓国国立中央図書館蔵・雲岑筆『古今和歌集』をめぐって―
第五章	長門二宮忌宮大宮司竹中家の文芸 ―未詳家集断簡から見えてくるもの―
	おわりに
	初出一覧

III 本論文の概要

以下において、本論文の概要を述べつつ、審査員による評価・位置づけ等を略述する。

まず序編は、書誌学的な分析の基礎についての概説であり、書誌学者である筆者の知見がまずここで明快に示される。第一章「日本古典書誌学論序説」では、日本の古典籍で用いられた基本的な装訂の五種類（卷子装・折本・粘葉装・綴葉装・袋綴）についての説明がなされ、これらの装訂と、そこに保存される古典作品との間には相関関係があり、特によく用いられた装訂である卷子装・綴葉装・袋綴は、この順で格が高く、卷子装が最も格の高い装訂であったこと、またその差はかつては認識されていたゆえに、格が低いものから高いものへの改装が頻繁に行われたことが指摘されている。そして研究者は、それを見抜いた上で、装訂と内容の関係を判断する必要があるとの提言がなされる。

第二章「日本語の文字種と書物の関係について」では、漢字・片仮名・平仮名の三種の用字と、書物との関係性や影響について、詳細に論じられている。漢字を主体とする卷子

装の写本や冊子の版本には罫線が存することが多いが、平仮名を主体とする写本や版本にはこれがなく、文字種が書物の製作に影響を与えていたという事実が明らかにされている。さらに漢字・片仮名の冊子本は、写本では罫線がないことが多いが、版本では罫線があるのは、印刷物であることを意図的に示していること、平仮名の江戸初前期の版本に写本と同様に罫線がないのは、写本の複製としての存在であることを示すものであり、両者では製作する意識に根本的な相違があることを指摘している。

この序編は本論文全体の礎石のような役割を果たしており、単なる序文ではない。形態を中心に書誌学の基盤の概括・整理、および文字種を基点に書物史の俯瞰がここで行われており、書誌学テキストの辞書的記述および書物史概説ともなり得る部分である。審査会で佐々木氏から、日本の中で書誌学用語の統一がはかられていないことは問題であり、これは英訳と同時にやりたいという意見も出された。日本の古典籍は世界中の図書館・博物館等にあり、それを扱う研究者・司書にとって本論文が有益であることは、本論文のさらなる意義と言える。なお、文字種については、中国と日本とは、写本と版本の権威が異なり、中国では版本が決定版で、写本はその下、日本では原則として写本が上で版本はそれを模すが、その差異が文字種による版本の差異にも影響を与えているのかもしれない。

第一編「卷子装と冊子本」では、最も格が高い卷子装にされることの意味、冊子体にとど様な影響を与え、どのように相関するかなどについて詳しく論じられている。

まず第一章「冊子本の外題位置をめぐって」では、外題の位置が、表紙左肩と表紙中央の2種がある問題をめぐって論じられている。書誌学文献や、入木道の伝書類などにおける関連記事、南北朝以前書写の原表紙を有する古写本の外題の調査などから、入木道伝書の作法にあるように、歌書類は左肩に、物語類は中央にあることが多い事実が確認される。しかし僧侶の書写のものでは必ずしも当てはまらないことや、私家集については、鎌倉初期頃までは中央が多く、鎌倉中期頃からは左肩が増える傾向があること、歴史物語は両様であること等が指摘され、その理由についても考察がある。なぜこうした位置の違いが生じたかに関しては、左肩は卷子装の表紙外題の位置と共通することに注目し、冊子の表紙左肩の外題は、それが卷子装に書かれ得る存在であることを示すこと等が論じられている。

第二章「絵巻物と絵草子―挿絵と装訂の関係について―」では、室町後期頃までは、本文のみの作り物語は卷子装とはせず、挿絵が入っていれば絵巻という卷子装として製作されるという不文律があったこと、そのため日本では絵入り冊子本が十六世紀になってから登場することが、具体的な実態とともに検証されている。絵巻から絵草子が生み出されるようなあり方、そして絵巻も絵草子と呼ばれるような状況などにも及び、卷子装という存在が日本の絵入り本の歴史に大きな影響を与えていることが論じられている。

第一・二編は卷子装を扱う編だが、この二つの編で、日本の書物における卷子装とその意味、また冊子本との関係について、明確な位置づけを与えたことは、本論文の眼目のひとつであろう。あえて言えば、筆者が主張する権威性を卷子装がもっていたことは首肯できるところであるが、例えば勅撰集や歌集等の編纂プロセスなどにおいては、卷子装が便利であり、おそらく利便性もあると思われる。書物はそもそも利便性と保存性という機能

を必要とし、例外もあり、きれいに整理しにくいとは思われるが、これらの機能との関係、あるいは「権威がある」という表現の意味するところについて、さらに説明があると良いかもしれない。また、国宝『源氏物語』の東屋巻に、冊子の文字テキストを読み上げる女房と、絵を見る浮舟の場面があり、絵巻の中とはいえ早い例であることは注意され、第二章で言及されても良いかと思われる。第一章の冊子の外題位置については、これまできちんと整理して位置づけられておらず、本論文の洞察によってはじめて明確になった。

第二編「卷子装と歌書・連歌書」は、卷子装の格の高さを象徴的に示す勅撰和歌集の奏覧本について、勅撰集全体と、准勅撰の『新撰菟玖波集』との伝本を対象として論じる。

まず第一章「勅撰和歌集と卷子装」では、古記録類などから、勅撰集の奏覧本の装訂は卷子装であるのが故実・規範であったことを検証し、その造本や清書者についても記録等から復元的に検討する。そして当初から卷子装であったとみられる勅撰和歌集の伝本・古筆切を博捜し、それらの資料価値の高さを指摘し、また記録等の天皇周辺の卷子本の記事を調査検討し、卷子本の権威性と役割、ジャンル意識と装訂の相関についても論じる。

第二章「勅撰和歌集の面影―『新撰菟玖波集』の卷子装本をめぐる―」では、『新撰菟玖波集』の現存唯一の卷子本である、慶應義塾大学斯道文庫蔵本（巻第一のみの一軸）を取り上げ、『実隆公記』から伺える同集の編纂・撰集過程を併せながら検討し、同本の筆者が、古筆家の鑑定にある連歌師宗牧ではなく、奏覧本の清書を担当した姉小路基綱であること、本文も資料的価値が高いことを明らかにし、推敲の痕跡などから奏覧本ではなく、その手前の中書本であろうという推定が導かれる。併せて翻刻が付されている。

第三章「卷子装であること―早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集〔政弘句抄出〕』をめぐる―」では、同様に当初から卷子装の早稲田大学附属図書館蔵の一軸を取り上げる。これは『新撰菟玖波集』ではなく、大内政弘の入集句を付句と共に抜書きしたものだが、何のために作られたものが不明であった。本文の検討や当時の背景を検討し、『新撰菟玖波集』の現存本に存する句が一句なく、逆に現存本で確認できない一句が存していることなどから、撰集協力者の牡丹花肖柏が、撰集の発起人・パトロンである政弘が死を目前にしていることを知り、政弘にその入集句を知らせるため、奏覧直前に急遽製作したものという結論が導き出されている。併せてこの異本句の存在は、編纂過程における句の差し替えの事実を示しており、従来の『新撰菟玖波集』の系統分類に再検討を促すことをも指摘されている。併せて翻刻が付載される。

この第二編の第一章は特に注目すべき論であり、二十一集に及ぶ勅撰和歌集全体を、卷子装という視点で見渡し、関連資料も含めて精査・検討し、卷子本というものがもつ意味と役割、そこにある意識を、明確に位置づけたものである。今後の勅撰和歌集の研究や、卷子装の伝本を研究する際に、必読の重要な論となっている。

第三編「源氏物語と書誌学」では、『源氏物語』の最善本とみなされて現在殆どの注釈書で底本として用いられている大島本（大島雅太郎旧蔵『源氏物語』）を取り上げ、書誌学から検討を重ね、三章にわたって多方面から詳しく論じている。大島本は従来、飛鳥井

雅康が書写した、大内家旧蔵の由緒ある伝本とされてきたが、それは誤りであって、「大島本伝説」とでも言うべきものであり、今後は正しい書誌学的定位のもとで再検討されるべきことを提言する編である。

第一章「大島本源氏物語」の書誌学的研究では、大島本の従来の書誌学的認識を整理した上で、疑問点を列挙、それらについて具体的に検討がなされる。筆跡や奥書、書入れや付箋、綴穴や蔵書印などの状況を詳細に分析し、大島本は一筆本の残欠十九冊を寄合書で補写して再び揃本にしたものであることをつきとめ、さらにその書写者も、首尾二冊を除いて地方武士であろうことを推測した。つまり大島本は、大内家旧蔵の飛鳥井雅康筆本そのものではなく、本文系統的にはその流れを汲むものではあるが、室町後期頃写の一筆十九冊の残欠本を、永祿六年（一五六三）頃に複数で補写して揃い本とした、吉見正頼旧蔵本である、という結論が導き出される。そうした大島本の実態を再認識して本文を再検討する必要があることを提言している。

第二章「二つの「定家本源氏物語」の再検討―「大島本」という窓から二種の奥入に及ぶ―」では、藤原定家による『源氏物語』注釈『奥入』の二種、即ち、大島本とその同系統の残欠本に存する「奥入」と、定家手沢本の帖末部分を切り出して作成された「自筆奥入」との先後関係について、検討がなされている。「自筆奥入」に残る物語本文の特徴と同本の書誌的な性格を、大島本とその同系統のものと比較し、「自筆奥入」が先行すること、同本が定家の日記『明月記』に見える『源氏物語』書写記事に該当する可能性が高いことなどが述べられる。大島本を絶対視せず、再検討することが、『源氏物語』本文研究に実際に大きく関わることを示した論でもある。

第三章「大島本源氏物語」続考―「関屋」冊奥書をめぐって―では、従来大島本が雅康筆とされてきた根拠である「関屋」冊の飛鳥井雅康奥書が、そもそも書写奥書ではなく本奥書であり、雅康筆ではあり得ないこと、全体ではなく「関屋」だけの奥書であること等を、別の視点から確定したものである。奥書の年代に近い書写の大正大学蔵本と比較し、大正大本の十三帖に存する書写奥書とは記述の形式に共通性があること、同大本と「大島本」の「関屋」本文が極めて近い関係にあることなどから、大島本の「関屋」冊は、欠落部分を室町時代の流布本で補写したものであり、その奥書が大島本全体に及ぶはずがないことを立証している。

以上の大島本『源氏物語』についての筆者の論は、従来の大島本の位置づけを覆すもので、その論証は明快で説得力に富み、結論も極めて妥当である。関連の学会において大きな話題となった論文である。今後の大島本『源氏物語』の扱いは、すべてこの論文を基盤としながら行われていくべきと思われ、まさしく道標となる論文である。

第四編「平家物語と書誌学」では、『源氏物語』と同じく「物語」と呼称されるが、軍記物語というジャンルに属し、性質・書物の形態等大きく異なる『平家物語』を対象として、書誌学的視点から考察を加えている。

第一章「書物としての平家物語」では、室町時代以前書写の伝本について、装訂や大きさ、外題と内題の有り様、表記法、書写された地域などを調査し、大ぶりの袋綴で、内題

の表記が不統一であることが多く、また地方性の濃い本が多い等、『平家物語』という作品の古写本が有する特徴をあぶりだし、作品の性質が造本に現れる実態を検証して見せる。ある作品の、伝本の総合的な俯瞰の方法の面白さと有効性が示されている論である。

第二章「卷子装の平家物語―「長門切」についての書誌学的考察―」では、『平家物語』の卷子本断簡である長門切を取り上げ、世尊寺流に属する三名の能筆による寄合書であろうこと、長門切本が絵巻であったかどうかは肯定説と否定説の両方があったが、絵巻であった可能性は低いことなどを指摘し、長門切本の特異性を明らかにしている論である。

第三章「「屋代本平家物語」の書誌学的再検討」は、やはり特異な形態を有する『平家物語』の一伝本である國學院大学蔵の屋代本（屋代弘賢旧蔵本）について、書誌学的な事項を中心に考察したものである。屋代本は大きさや装訂が極めて珍しく、紙質は上質であり、『平家物語』写本としては異常なほど能筆で、三条西公条の書風との共通性もあり、成立の場が高貴であろうこと、室町中後期頃の書写の可能性が高いこと、貴人への献上や奉納等の特別な理由で製作された可能性が高いことなどを論じており、『平家物語』伝本における屋代本の異質性を浮き彫りにし、屋代本の本文研究の道筋を開いた論と言えよう。

以上のように、この編では、『平家物語』の伝本全体を見渡し、また長門切本と屋代本という主要伝本に注目し、いずれも画期的な指摘がなされており、今後の『平家物語』研究に資するところ多大である。また軍記文学のうち、作り物語や歴史物語と同様に「～物語」と呼ばれる作品名ではなく、『太平記』のような「～記」という作品群があり、性格がやや異なるが、これらについてもいずれは研究がなされていく必要があるであろう。

第五編「古典文学と書誌学」では、随筆『枕草子』、歴史物語、歌書などの伝本の書誌学的な特徴などを検討すると共に、古典文学作品の受容者、同時にその伝本の生産者でもあった地方武士の文芸と書写の活動についての考察がなされている。

第一章「定家本としての「枕草子」」では、『枕草子』のいわゆる三巻本にある安貞二年三月付奥書に見える、記主「耄及愚翁」が藤原定家である可能性は、半世紀以上放置されてきたが、これは定家と確定でき、定家本であることを、奥書の表記・本文勸物の特徴などから確定した。そして、「定家本」と呼称すべきことを本文や勸物から示すとともに、受容史を辿り、定家本の抄出・抜書本はかなり多いものの、定家本自体は中世においてはあまり流布せず、定家本は抜書も含めて僧侶や連歌師によって伝えられてきたこと等を論じ、最後に『枕草子』研究において今後の検討が必要となる諸問題を提示する。

第二章「書物としての『枕草子抜書』」では、前章で論じられた『枕草子』定家本（いわゆる三巻本）からの抜書本を対象として考察されている。現存する五伝本の書誌情報を示した上で、それらが直接的な書承関係にはなく本文にも距離があることから、室町時代にはおそらく失われた伝本が数多く存在し、かなり流布していたと推測されること、五本は書誌的にみても連歌・連歌師と関係を有すること、おそらく連歌の付合の参考書とするための抄出であったことが述べられ、今後の抜書本を含めた『枕草子』研究の可能性と方向性が示唆されている。

第三章「書物としての歴史物語」は、第四編第一章において『平家物語』を扱った方法

と同様の方法を用いて、歴史物語である『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』を対象として、その古写本や古筆切の書誌的な特徴を網羅的に調査して考察したものである。その結果、歴史物語は卷子装で製作され得る存在であったこと、『栄花物語』と『大鏡』は保存される冊子の形状に異なる傾向があり、それが作品の性格の違いを示す可能性などを指摘し、書物の形態と保存される作品の相関関係を検討することの重要性を示した。

第四章「室町期東国武士が書写した八代集—韓国国立中央図書館蔵・雲岑筆『古今和歌集』をめぐって—」は、韓国国立中央図書館蔵の定家貞応二年本『古今集』の綴葉装一帖に、弘治三年九月付「雲岑軒早雪」という書写奥書が存することを起点として、同書とそれを含む八代集とその背景について、考察される。同図書館に「積雲岑」の奥書をもつ『拾遺集』も存していることから、八代集として書写された可能性を求めて、雲岑奥書を有する『後撰集』『後拾遺集』『金葉集』の日本国内における存在を見出し、『千載集』は所在不明ながら、七伝本の調査を行い、そして奥書の人物が関東の有力武士、上杉憲賢であることを突き止め、室町後期における東国武士の書写・文芸活動、歴史的背景、地方武士の書写による写本の存在とその意義などについて論じられている。

第五章「長門二宮忌宮大宮司竹中家の文芸—未詳家集断簡から見えてくるもの—」では、室町後期に山口から九州に旅した人物の紀行文的な家集の断簡を起点として、長門国府周辺の文芸活動を、二宮忌宮神社の大宮司家の竹中家（武内家）歴代を中心に探り、大島本『源氏物語』が同家と関連する可能性や、大島本『源氏物語』と長門本『平家物語』の補写部分のある巻の書風の共通性などを指摘、地方の文芸研究の可能性について論ずる。

このように、随筆『枕草子』、そして歴史物語五作品について、本質的かつ重要な多くの指摘がなされる。また、韓国で見出された一つの本から、あるいはそれほど古いわけでもない一枚の断簡から出発し、一つ一つ新たな扉が開かれるように、その資料をめぐる文化的動態が判明していく。書誌学による手法が鮮やかである。最後では、大島本『源氏物語』と長門本『平家物語』とが、年代的にも地域的にも近い製作である可能性が示され、これは書誌学を切り口とした、ジャンルを超えた研究であるからこそその研究成果である。

なお、全体に言えることだが、多くの書誌データ・本文データを扱うが、本論文では表を用いていない。おそらく表にすると落ちてしまう情報や、ミスリードなどを避けて、表を用いていないのであろうが、たとえば外題の位置や、本文異同など、表にすれば全体の傾向が把握しやすいとも思われ、いくつか表があると良かったかもしれない。

IV 総評

本論文について、編ごとに審査員による意見を記したが、全体を総括して総評を述べる。

書誌学・文献学と文学研究とは、本来融合し補完し合いながら発展していくべき学問であるが、現在に至るまでの日本古典文学研究において、必ずしも書誌学と文学研究とが深く結びついて展開しているとは言えず、それぞれの書物の形態的特徴が、各作品・本文の特質と深く関係しているということは、研究者間で明確に共有されてこなかった。書誌学はあらゆる書物を対象とする重要な学問であるが、これまでは書誌学の側から広く発信す

るという機能がやや弱かったという面もあるかもしれない。一方、本文・作品研究の側では、その分野にもよるが、書誌学の成果を吸収することの重要性に注意を怠りがちであった面もあるかもしれない。本論文は、この大きな問題に真正面から取り組んだものである。

筆者は本論文の最後で、「内容を深く検討するためには、その本文の器たる書物の書誌的な情報を抽出し、それを活かしてその本文の性格や価値を確定した上で、研究に用いるように心掛けることによって、誤りの少ないより本格的で深い研究が可能となるはずであることを明らかにできたものと確信する。」と述べている。その言葉の通りに、本論文では、書物から正確な書誌情報をいかにして読み取るか、それをどう生かすかが、懇切な説明とともに丁寧に示されている。その上で、筆者が多くの書物・作品を対象にして論じてみせているプロセスと結論とは、歌書にしても、『源氏物語』『平家物語』その他にしても、数々の新見に満ちており、長年の誤認を訂正し、新たな位置づけや見方、新たな分類、新たな研究の可能性を導き出すもので、実証的でありながら革新的な研究成果であり、今後の研究に多大な影響を与えるものである。本論文の内容に関して学界で議論となった部分も多く、それは「概要」において記したが、それは本論文が提起している問題の大きさと、筆者の問題把握の新しさを示すものであると言えよう。

書誌学の研究としては、本論文ほど、広く研究に還元されることをめざして人に語りかけるといふ姿勢をもつ論は他になく、また作品・本文研究としては、本論文ほど、ジャンルを超えた広く深い書誌学上の専門的洞察に裏打ちされた論は他になかったと言えよう。本論文は、作品が保存された器である書物に注目することが、作品自体の研究にどれほど重要で有益であるか、さまざまな視点から懇切に説いている。また論文としての記述や論理構成が明快で、異なる領域の研究者にもわかりやすく、かつ説得力に富む。

筆者には、本論文に収められた論のほかにも、数多くの既発表論文がある。その中からこうした研究目的にかなう論のみを選択して本論文『日本古典書誌学論』を構成しており、そのことが、本論文の研究目的と特質、そして達成を、鮮明なものとしている。

本論文は、高度に専門的、かつ穏当な研究方法をもって、研究対象を正確に分析・実証することを、その論の骨格としている。書誌学により読み取られた「かたち」と、作品・本文とが深く関連すること、そこから研究が深化していくことを、いくつもの具体的な事例に即して実証し、かつ俯瞰的な視座から眺めるといふ、両面で検証して見せたものである。書誌学と文学研究が融合して成果を生み出すという、新しい研究領域を切り拓いた論文であり、客観的分析に基づいた、壮大な文化研究でもある。本論文の中では、今後論じられていくべき、そして論じられていくに違いない新たな研究テーマが、数多く示唆されている。本論文は、今後の日本古典文学研究、書誌学研究において、大きな道標となるに違いない論文であり、言うまでもなく研究史上の意義は極めて高い。

なお、筆者の佐々木孝浩氏は、日本中世文学、和歌文学、書誌学などにおいて、現在多くの学会で研究をリードする研究者であり、日本はもちろん海外の研究者からも尊敬される存在である。また本論文の内容は、笠間書院より本年六月二十日付で刊行されている。

以上のような本論文の内容・意義により、審査員一同が一致して、本論文が、博士（学術）を授与するにふさわしいものであると判断した。